

## 第6群 流早産に関する問題

## 35. 本邦に於ける頸管妊娠の統計的観察

(養育会) 谷山清司, 上里忠敏, 助川幡夫

本邦に於ける頸管妊娠の症例報告は既に50例をこえているが、そのうち広義の例や詳細の不明な例を除外して、狭義の頸管妊娠とされている38例(養育会における6例を含む)を資料として、とくに臨床面に重点をおいて統計的観察を行った。

年齢分布: 20才代が最も多いが(55%), 妊娠可能な全年令層に発生し得る。

既往の妊娠分娩: 経産が半数(52%)であるが、流産のみが32%で、全くの未妊婦が16%もあり、つまり未だ児のない者が半数近くをしめていることは注目に値する。そして大部分(82%)の者が既往に流産の経験のあることも一つの特徴である。

前回の妊娠分娩: 前回は10カ月の分娩の者は僅かに7%にすぎず、93%が流産で(未妊婦も含めた全例の71%), しかも流産後3カ月までの発生が52%(流産後発生の例のうち)で、6カ月までとすると65%となり、つまり流産後ことに数カ月以内の発生が多いと云い得る。

症状: 性器出血は必発の症状であるが、下腹痛(18%)や下腹部緊満感(24%)を伴うことは少い。出血の始まりは最終月経より8週までが66%で過半数をしめる。突然の大出血で始まる者もあるが(8%), 多くは少量乃至中等量の持続的又は断続的である。しかし大部分の例(87%)には経過中に大出血をみる。その回数は1乃至2回が多いが3回以上の例も少くない。大出血の誘因は、誘因なしの自然が41%, 処置時が37%で、診察時が20%である。

妊娠持続期間: 便宜上終経より最終処置までの期間とすると、16週以内が大部分をしめる(78%)。

生物学的妊娠反応: 行った例では大部分(89%)が陽性である。

診断と処置: 最初の出血より最終処置まで1カ月や2カ月かゝっている例が多く、その間に各種の臨床診断のもとにいろいろの処置を受けている例があつたりして、統計がとりにくいのであるが、最初的手術的処置とその時の臨床診断をみると、子宮腔内着床の流産として内容除去術(子宮腔内の)を受けた者が55%で過半数をしめる。最初から子宮全別を行ったものは21%で、このうち頸管妊娠と診断されたものは3例(全体の8%)に過ぎ

ない。この最初からの全別例を含めて、最終的処置は95%が全別で、他に5%の腔上部切断例がある。これらの最終的処置の直前の臨床診断は、悪性腫瘍が37%(うち絨毛上皮腫が大部分)で一番多く、頸管妊娠は34%で、他に筋腫、頸管損傷、奇胎妊娠等々で、つまり最終処置時においても正しい診断のついたものは全体の1/3にすぎないのである。

予後: 死亡例は1例もない。全例に生児は得られていない。また全例が子宮全別か腔上部切断術であるから、今後の妊娠が不可能であることは云うまでもない。

35. に対する追加 (京大) 浅野 定, 宮本 一  
頸管妊娠の治療にあたって妊娠の可能性を残し得た1例を追加する。

患者は27才、満期産1回、人工妊娠中絶を1回受けている。

2カ月の無月経の後大出血を来し、流産として内容除去術を受けたが、その後再び大出血を来したので入院した。

外子宮口に異常はないが、頸管壁の左側内子宮口に近く挿入したゾンデの先端を腔壁を通してはつきりふれる程のくぼみを認めたので頸管裂傷を疑い、場合によっては子宮全別術を行う覚悟で、先ず腔壁さらに膀胱を子宮頸から剝離した上頸管を切開してみると、前にのべたくぼみには脱落膜様組織が附着していたので、これを除去して頸管および腔壁を縫合したところ、その後完全に止血し経過順調に退院した。

除去した組織片は脱落膜および絨毛組織であり頸管妊娠であることが判つた。

本例は前回の出産児を肺炎のため失っており将来妊娠を望んでいたもので、その可能性を残し得た1例として追加する。

## 35. に対する追加

(横浜市大) 松井 豊和, 太田 徹  
我々も最近頸管妊娠の3例を経験致しましたので、こゝに追加させていただきます。

症例Ⅰは23才の1回経妊で、その前回妊娠は最終月経の1カ月前に妊娠第2カ月に人工妊娠中絶を受けて居ります。

症例Ⅱは29才の2回経産1回人工妊娠中絶を受けたもので、前2回は正常分娩で前回妊娠は最終月経の6カ月前に症例Ⅰと同様妊娠第3カ月に人工妊娠中絶を受けて

居ります

症例Ⅲは27才，2回正常分娩，2回人工妊娠中絶の患者で，前回妊娠は最終月経の1カ月前に妊娠第3カ月で人工妊娠中絶を受けて居ります。

以上3例共に病理組織学的検索により狭義の頸管妊娠であることを確かめ得ました。人工妊娠中絶後であり1～6カ月間が短い点が特異

なお3例共子宮内膜はいずれも脱落膜様変化は示して居りませんでした。

### 36. 切迫流早産のホルモン療法 特に Dimethisterone の臨床効果について

(大阪回生) 的塾 中, 石津重季, 上道知三

本症に対するホルモン療法は，従来 Estrogen, Progesterone, Chorionic Gonadotropin, 甲状腺ホルモン, 副腎皮質ホルモン等が，或は単独に，或は併用して種々の形で用いられて来た。演者等は，此等の治療成績について，数回に亙り報告して来たが，今回は昭和33年以後の 19-Nor. Steroid, 17 $\alpha$ -hydroxyprogesterone Cop+Progesterone (Oohormin luteum Dep) Enavit, Map 及び Dimethisterone の使用成績について，その成績の概要を述べる。5例の習慣性流産を含む62例の流早産に 19-Nortestosterone (Norluten, Lutenin) を使用し，56例に有効，無効6例で，1日3～10mg，総量15～200mg，Oohorminluteum Depは14例中，有効10例，比較的有効2，無効2，Enavit, Map については，未だ少数例で，現在検討中である。

新黄体ホルモン様物質，62-21 Dimethyl-Ethisterone (Sekrosterone) の臨床効果について

本剤は極めて強力で，BDT，上昇作用は5mg投与で著明でないが，10mg投与で稍々上昇を認め，投与中止後消腿性出血をみる。子宮内膜は，15mg10日間投与により，腺及び間質の増殖，拡大，間腔内に分泌像を認めた。

予め Estradiol 投与すると，著明に現われる。本剤の切迫流産に対する治療として，21例に使用し，一応全例に有効であったが，後程2例は流産し，他の19例は目下妊娠継続中である。又本剤のAndrogenic Estrogenic 作用及び蛋白同化作用については，今後の検討が必要である。

尚，以上の各物質の副作用であるが，吾々の使用量では1例も認められなかった。

### 36. に対する質問 (東大) 官川 統

1) 東大に於て現在迄習慣性流早産 406例について尿

中プレグ 17-KS, Est 及び血清コレステロール値を全経過について調べて居りますが，切迫症状を少し示しても尿中ホルモン排泄は子宮内胎児死亡のみを除いて対照と差異は認められて居りません。

1) 貴下のホルモン治療の根拠

2) 治療効果の Kontrol 如何

答弁 (大阪回生) 石津重季, 的塾 中

既に述べた如く流産の原因は多岐多様である。御追加の如く，1) 血液型検査は習慣性流早産例の大部分に行っているが何れも Rh 因子には変りなく2例にA B因子に関する抗A免疫抗体中等度に現われた程度で之れが原因と思われぬ(第22回近畿産科婦人科学会総会記事 174頁参照) 2) Pregnandiol 測定は施行し得なかつたことは遺憾である。流産の出血は自然に止るか流産に終るか2つしかない。之を早く止血して妊娠持続するのがわれわれのとるべき最善の処置である。Progesterone の作用は子宮筋の弛緩作用があり又止血作用も考えられている。表に見る如く比較的短期間に良好な成績を得ている。ホルモン投与の治癒機転は機能出血に徴しても定量のみにて決定出来ないことは衆知のことである。

### 37. 習慣性流早死産症例50例の血液型学的観察

(鳥取大) 田中正久, 上野良亮

(鳥取大法医) 岡田 吉郎

2回以上連続して流早死産を反復した症例50例の夫婦につき，詳細な血液型判定，妻血清中の免疫抗体価の測定，殊に Panel of Cells による特殊な抗体検出法を実施し，次の成績を得た。

1) 夫婦間A B O式不適合

夫婦間にA B O式不適合の存在しなかつた者30例，存在した者19例，不明1例であった。30例，存在した者19例，不明1例であった。不適合例の分類は妻O夫A 5例，妻O夫B 1例，妻O夫A B 2例，妻A夫B 6例，妻B夫A 5例であった。この中，妻血清中にA B O式免疫抗体を証明した者は9例で，全症例の18%，不適合症例のほぼ半数にあたる。その内訳は，妻O夫A 3例，妻O夫A B 2例，妻A夫B 1例，妻B夫A 3例で，抗A抗体が9例中8例で圧倒的に多くみられた。

妻血清中に免疫抗体の認められなかつた3例に於てはその後生児が得られた。次にA B O式免疫抗体は認めなかつたが，その他の血液型因子による抗体を証明した者が2例あり，夫々抗E 1例，抗Le<sup>a</sup> 1例であった。又抗A抗体と同時に抗E，抗Cを伴った各1例宛がみられた。以上の成績からA B O因子の中では，A因子が習慣性流